

「特色ある共同利用・共同研究拠点」中間評価結果

大学名	文化学園大学	研究分野	生活科学、衣・住生活学
拠点名	服飾文化共同研究拠点		
学長名	大沼 淳		
拠点代表者	濱田 勝宏		

1. 共同研究拠点の概要 ※中間評価報告書より転記

[共同研究拠点の目的]

- ・服飾文化共同研究拠点は、平成24年度までの拠点整備事業によって、所蔵する服飾文化研究資料を更に充実させ、服飾関連研究者に開放することによって、170名余の研究員が44件の分野横断的な共同研究を推進し、服飾文化に関わる研究者のコミュニティを形成し、研究成果を蓄積し、これをWeb上に公開して国内外に発信してきた。また、服飾文化の研究者及び研究資料の情報をデータベース化してその利用を公開し、服飾文化に関心のある者の便宜を図ってきた。
- ・これを受けて、今後も、共同利用・共同研究の成果の蓄積を研究者にフィードバックし、また、服飾文化研究資料の開放等を継続して行うことで、既に形成された研究者コミュニティの活動を支援するとともに、服飾文化に関心のある研究者コミュニティの拡充と若手研究者の掘り起こしを図ろうとするものである。
- ・これまでの共同研究課題44件のうち、「きもの」に関する研究が13件あった成果に鑑み、和装の文化的側面から現代ファッションへの応用にわたる研究を一つの重点分野として共同研究・共同利用を促進しようとするものである。
- ・服飾文化研究に関わる成果は、服飾文化に関わる学際領域の研究者に対してグローバルに発信し、日本の服飾文化研究の世界的な浸透を図ろうとするものである。
- ・服飾文化の共同研究促進と研究情報発信のグローバルな展開により、服飾文化の研究と情報発信の我が国における拠点としての活動の充実を目指すものである。

[共同研究拠点における成果及び目的の達成状況]

- ・服飾文化共同研究拠点として拠点認定後の3年間にわたり、引き続いて拠点の豊富な服飾文化リソースを有する図書館・服飾博物館・ファッションリソースセンターの開放に努めてきた。また、現在までの研究成果の蓄積を“文化学園リポジトリ”としてインターネット上に公開し、研究者コミュニティの活動支援に努めている。一方で、文化学園の若手教員を対象に若手教員研究奨励金を交付し、若手研究者の育成に努めるとともに、外部との共同研究を促している。
- ・共同研究員に対しては、文化学園大学教員と同様の研究上の待遇を与えて、前述した図書館・服飾博物館・ファッションリソースセンターの服飾文化研究関連資料を、拠点の認定期間である6年間にわたって使用を可能としている。また、平成25年度にイギリス人1名、平成26年度には韓国人を含む3名、平成27年度には若手研究者1名を、それぞれ共同研究員として採用し172名の構成員によってグローバル化を推進し、研究者コミュニティの拡大を図っている。
- ・平成25年4月1日付で文化ファッション研究機構の下で和装文化研究所並びに文化・ファッションテキスタイル研究所を開設し、各々が特色ある活動を展開している。和装文化研究所では、平成27年度に文化庁の「文化財アーカイブ中核拠点形成モデル事業」に武蔵野大学・京都工芸繊維大学とともに採択され、3者が連携してアーカイブの構築に向けて活動を始めた。また、文化・ファッションテキスタイル研究所では、テキスタイルのアナログデータをデジタル化する一方で、アレンジボーダーなどの新しいテキスタイルの開発を進めている。同研究所

では繊維学会被服科学研究会から見学を受け入れ、研究所長が日本家政学会被服整理学研究会で講演をする等の研究者コミュニティへ貢献する活動をしている。

- ・前述した「文化財アーカイブ中核拠点形成モデル事業」で採択された「服飾文化における未発掘資料の調査と管理状況の改善に向けた協力拠点形成事業」は、流出・消失する恐れがある貴重な服飾文化に関わる資料を保存・継承するとともに、全国に散在する服飾文化のネットワーク構築、その構築による研究者コミュニティへの貢献を目指すものである。
- ・文化・ファッションテキスタイル研究所では、平成26年度と平成27年度に文部科学省委託事業「成長分野等における中核的専門人材養成等の戦略的推進事業」の「興隆するファッションテキスタイル産業のためのプロフェッショナル育成プロジェクト」に採択され、伝統織物産地と現代織物産地の調査を踏まえて、学部学生及び社会人のための教育プログラムを策定し、実施した。この取組は、美術系の大学と産業界のメンバーの共同によって推進し、織物を伝統的側面から現代的側面にわたり解析した成果を、教育プログラムへと還元するものである。
- ・文化学園大学において第16回IFFTI（国際ファッション工科大学連盟）の国際会議・年次総会を開催し（平成26年1月27日～31日）、社会経済、ビジネス、産業、マーケティング、商品化、文化、技術、教育等の様々な領域の研究発表が行われ、研究情報発信のグローバルな展開を図った。
- ・平成27年9月1日から3日にかけて、日本感性工学会第17回大会を文化学園大学で開催し、「魅せる感性」のテーマで、人文・社会学系から自然科学系までの多様な視点からワークショップ、ポスターセッション等が行われ、幅広い分野の研究領域が交流する場を研究者コミュニティに提供した。

2. 評価結果

(評価区分)

C：拠点としての活動が十分とは言えず、専門委員会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた事業計画の適切な変更が必要と判断される。

(評価コメント)

本拠点が有する服飾文化研究に関する社会的にも重要かつ特色ある資料及びデータベースの活用実績はあるものの、拠点としての活動が十分とは言えず、専門委員会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた拠点の活動計画の適切な見直しが必要と判断される。

また、特色ある共同利用・共同研究拠点としての特徴的な取組である公募型の共同研究が全く行われておらず、拠点としての運営体制、及び外部委員を含む運営委員会が拠点の活動にどのように関わっているのかが不明瞭であり、学外に開かれた体制が構築されているのか懸念がある。さらには、本拠点が有する資料及びデータベースの公開などを通じて、関連する研究分野や研究者コミュニティへの貢献や、どのような研究成果につながったのかが整理されておらず、拠点の実績を把握することが困難である。

今後は、運営委員会が機能的な役割を果たすとともに、関連コミュニティからの意見等を踏まえ、拠点の活動方針を明確にすることが必要である。また、拠点の安定的かつ継続的な運営を行うためにも、学内からの支援のみならず、外部からの研究費の獲得や、共同研究を展開するための方策の策定など、本拠点の目的に即した取組を行うことが必要である。